

# 英語を母語とする日本語学習者の 外来語使用行動の実態とその背景要因

堀切 友紀子

## 要 旨

本研究の目的は、これまで明らかにされてこなかった英語を母語とする日本語学習者の外来語の捉え方について解明することである。英語を母語とする日本語学習者 11 名に対して半構造化インタビューを行った結果、外来語を日本語として捉えている認識と、英語として捉えている認識が存在することが明らかになった。また、外来語を日本語として捉えている場合には、外来語に対して肯定的な感情を抱きやすく、その結果として積極的な外来語使用または文脈を意識した使い分けといった行動に至ることが見出された。一方、外来語を英語として捉えている場合には、否定的な感情を抱きやすく、外来語の使用に対しても消極的な行動へとつながる傾向が示された。このことから、外来語を自分の母語として捉える度合いは、対象文化をホスト文化の枠組みで捉えようとする異文化適応とも関連している可能性が示され、その中で外来語が自らの母語の意識化を引き起こす側面を持っていることが示唆された。

【キーワード】 外来語、日本語学習者、英語母語話者、異文化適応

## 1. 問題の所在と研究目的

日本語学習者にとって、外来語は苦手な領域として扱われてきており、中山他(2008)の研究においても、日本語学習者に対するカタカナ語<sup>1</sup>の読み書きに関する困難度の調査から、「(日本語)学習者自身が日常生活における困難さから今以上のカタカナ教育を必要としている」と指摘している。

特に英語話者にとっては母語が原語となっているカタカナ語はその意味のずれから混乱を招きやすく(宮田, 1991)、母語と目標言語との対立が際立つために困難度が増して特有の傾向・規則を形成する傾向が示されてきた(大曾 1991、稲垣 1991、小林他 1991、山縣 1999、戸田 1999)。

このように、日本語学習者が外来語学習時に困難を抱えている実態は一般化されているが、この困難度は日本語学習が進むにつれて解消できるという単純なものではない(小宮, 1997)。茜(1998)においても、外来語学習時の困難度には、学習者の日本語学習期間よりも、母語の音韻体系や学習環境の違いが影響を与えていることが示されている。母語や環境が、外来語学習において、大きな影響を与えているということは、それらの違いによって学習者自身がそれぞれ外来語に対して異なる態度を形成している可能性を示唆している。

実際に、日本語母語話者の間でも外来語に対す

る異なる態度が存在することが明らかにされてきた。鈴木(2000)は、日本語母語話者の外来語観が「礼賛」、「容認」、「排斥」、「否定」という 4 類型に体系化され、日本語母語話者間にも外来語に対する態度には多様性があることが示しているが、同じ日本語使用者としての日本語学習者はこの分類の対象には含まれていない。

しかし、日本語学習者の抱える外来語に対する困難度と、外来語に対する認識・態度には密接な関連があり、それが文化的・言語的背景ともつながっていることが陣内(2008)においても指摘されている。そこでは、日本語学習者の外来語に対する意識を質問紙調査によって明らかにしているが、主な対象者は中国語、韓国語母語話者であり、英語を母語とする日本語学習者に関しては回答者数が 20 名と少ないため、母語の比較の際の量的分析対象からは外されている。

堀切(2008)は、英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する態度を明らかにすべく、英語母語日本語学習者 93 名を対象にその外来語受容態度についての分析を行った。その結果、英語を母語とする日本語学習者の外来語受容態度は、鈴木(2000)で示された日本語母語話者の持つ外来語受容態度とは異なり、「積極的受容」、「拒絶」、「英語優位性」、「英語干渉」という 4 つの因子からなることが明らかに

なった。具体的に、「積極的受容」とは、「もっと外来語を理解して使用したいと思う」という外来語に対する積極的な態度であり、その対極にある「拒絶」とは、「外来語を使うと誤解を生じさせるだけだ」といった外来語に対する否定的な態度である。また、「英語優位性」とは、外来語を学習者の母語である英語と関連付け、「外来語学習において英語を知っていることが学習者を優位な立場にする」という楽観的な態度である。一方で「英語干渉」とは、「外来語学習時、英語を知っていることが邪魔になる事がある」等の否定的な態度であり、同じ母語である英語と関連させている態度でも、そこには異なる側面が存在することが示されている。この外来語受容態度は、自文化・ホスト文化をめぐる4つのカテゴリーであることに加え、それらが実証的データとしても時間的・空間的影響を受けておりアイデンティティとの関わりも示唆されたことから、異文化適応過程との関連が指摘されている。

異文化適応に関しては、Berry et al. (2002)において、自文化・ホスト文化の受容の度合いを軸とした「同化」、「分離」、「統合」、「境界」という4象限の態度が存在することが明らかにされている。「同化」とは、自分の文化的アイデンティティを保持することを求めず、ホスト文化との相互作用を求めている場合である。反対に、自分の文化を保持することに価値を置き、ホスト文化との相互作用を避ける場合、「分離」と定義される。また、自分の文化とホスト文化との相互作用の両方に価値を置く場合は「統合」であるとされ、その反対が「境界」である。さらに、Martin & Nakayama (2004)は、異文化滞在者はホスト文化との関係においてこの4タイプの態度を組み合わせていることが多いことが指摘している。この、自文化とホスト文化をめぐる4カテゴリーが存在することは、英語という母語と日本語という対象言語をめぐる4カテゴリーの態度が存在する外来語受容態度と何らかの関連があることが推測される。

しかし、これまでのところは日本語学習者が外来語を母語である英語とどの程度関連させて捉えているかの詳細や内容については検討されていない。そのため、日本語学習における外来語をめぐる自文化とホスト文化との関わりが明らかになっておらず、異文化適応との実際の関連が示されていないという問題点がある。以上のことから、本研究では英語を母語とする日本語学習者が、外来語を英語との関連

においてどのように認識しているか、さらにそこで生じる感情や、実際の外来語使用行動がどのようなものを異文化適応の枠組みを用いて質的な観点から探ることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査時期と対象者

2007年7月に、米国の大学で日本語を学習してきた大学生13名を対象に、1時間程度の半構造化インタビューを行った。対象者は、男性8名、女性5名であり、年齢は18歳から23歳までであった。この13名は、米国の大学で日本語のクラスを1年間履修した後<sup>2</sup>、約2か月間日本国内の大学に滞在しながら日本語を集中的に勉強するというプログラムに参加しており、来日時点で彼らの日本語レベルは初級前半を終えた程度であった。また、条件を統一するために、本研究において英語を第二言語とする2名<sup>3</sup>は分析の対象とせず、英語を母語とする11名を扱うこととした。対象者の属性データを表1に示す。

表1 対象者の属性

	母語	年齢	性別	専攻	日本語学習歴
A	英語	19歳	女	日本語	1年
B	英語	20歳	男	日本語/デザイン	1年
C	英語	23歳	男	経済/日本語	1年
D	英語	19歳	女	日本語/フランス語	1年
E	英語	20歳	男	音楽	1年
F	英語	18歳	男	日本語/心理学	1年
G	英語	19歳	男	文学/第二日本語	1年
H	英語	20歳	男	デザイン/日本語	1年
I	英語	18歳	女	日本語/英語	1年
J	英語	18歳	女	日本語/英語	1年
K	英語	19歳	男	日本語/人類学	1年

この対象者の参加していたプログラムは、アメリカの大学の日本語クラスの2学期分に相当するカリキュラムを日本で履修しながら、その他の時間には日本の大学生との合同授業への参加、日本人大学生との会話練習に加え、日本文化体験を目的としたフィールドトリップなどを体験するというものであった。また、殆どの対象者にとって今回のプログラムが初めての来日経験であり、実際に生活の中で日本語を使用する初めての機会であった。本インタビュー調査は、来日後約1ヵ月半の時点で行った。

## 2.2. 調査・分析方法

半構造化インタビューの主な内容は、①外来語をどのように捉えているか(認識)、②外来語に対してどのような感情を持っているか(感情)、③実際どのように外来語を使用しているか(行動)についてである。この認識、感情、行動という分類は、人が新たな経験の中で調整行動を行う際に自身のスタンスを決定する上での要素である(渡辺、1995)。また、本研究における「外来語」とは、カタカナで表記された英語由来の語を指すこととし、インタビュー開始時に各対象者にそのことを伝えた上で調査を行った。インタビューは全て英語で行われたため、それらを文字化した後、日本語に翻訳し、KJ法を用いてカテゴリー化して分析を行った。具体的には、以下のような手続きを経た。

- 1) インタビュー内容から、1つの発言内容を1つのデータとして切片化し、カードに書き出した。
- 2) カードの中で、内容の近いものをひとまとめにして切片群を作り、集まったカードの内容を反映

するカテゴリー名を作成した。

3) 研究協力者2名と共にカテゴリーやそのネーミングの妥当性について検討を重ねた。さらに、分析の信頼性を確保するため、日本語母語話者2名<sup>4</sup>と一致率を求めた結果、最終一致率は81.8%であった。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 各カテゴリー内容とデータ数

分析の結果、①外来語に対する認識については、外来語を日本語として捉える認識と、英語として捉える認識が見出された。また、②外来語に対する感情については、肯定的感情と否定的感情が存在することが示された。さらに、③実際の外来語使用行動に関しては、積極的使用、文脈を意識した使い分け、消極的使用という3つの使用行動が存在することが明らかになった。以上のカテゴリーとそれらの関係性を図式化したものを図1に示す。また、括弧内の数字は、それぞれのカテゴリーの中に含まれたデー

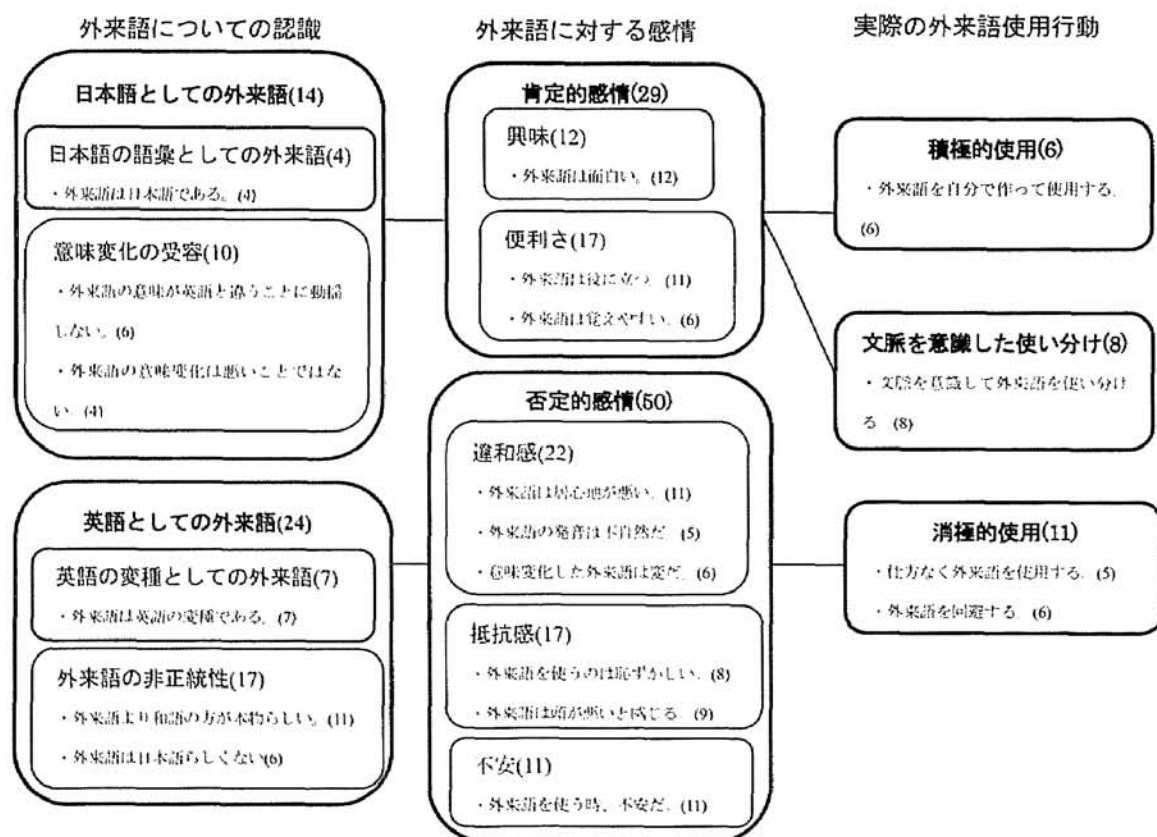


図1 外来語についての認識・感情・使用行動

タの件数である。

まず、①外来語に対する認識については、「日本語としての外来語(14)」と、「英語としての外来語(24)」という2つの側面が見出された。「日本語としての外来語」とは、「日本語の語彙としての外来語(4)」という認識と、「意味変化の受容(10)」からなる。「日本語の語彙としての外来語」とは、「外来語は日本語である(4)」という認識であり、「意味変化の受容」とは、「外来語の意味が英語と違うことに動揺しない(6)」、「外来語の意味変化は悪いことではない(4)」という認識を指す。一方、「英語としての外来語(24)」の中には、「英語の変種としての外来語(7)」と、「外来語の非正統性(17)」という認識が見出された。「英語の変種としての外来語」とは、「外来語は英語の変種である(7)」という認識であり、「外来語の非正統性」とは、「外来語より和語の方が本物らしい(11)」、「外来語は日本語らしくない(6)」という認識からなることが明らかになった。

次に、②外来語に対する感情については、肯定的感情(29)と、否定的感情(50)が見出された。肯定的感情には、「外来語は面白い(12)」という興味や、「外来語は役に立つ(11)」、「外来語は覚えやすい(6)」等の便利さといったものが存在することが明らかになった。一方で、否定的感情とは、「外来語は居心地が悪い(11)」、「外来語の発音は不自然だ(5)」、「意味変化した外来語は変だ(6)」などの違和感や、「外来語を使うのは恥ずかしい(8)」、「外来語は頭が悪いと感じる(9)」という抵抗感に加え、「外来語を使う時、不安だ(11)」といった不安も見出された。

さらに、③実際の外来語使用行動については、「外来語を自分で作って使用する(6)」という積極的使用や、「文脈を意識して外来語を使い分ける(8)」という文脈を意識した使い分け行動に加え、「仕方なく外来語を使用する(5)」、「外来語を回避する(6)」等の消極的使用という3つのパターンが存在することが明らかになった。

以下では、これらの認識、感情、行動の関連性についての記述を行う。

### 3.2. 外来語に対する認識、感情、使用行動の関連

#### 3.2.1. 外来語を日本語として捉える場合

対象者の持つ外来語についての認識には、外来語を日本語として捉える認識と、英語として捉える認識の二つが存在することが分かった。

まず、外来語を日本語として捉える認識とは、外来語を日本語の語彙の一部として捉えるものである。具体的には、「外来語は(英語を)日本人なりに解釈して独自の意味を作り出したものだと思う」、「外来語は日本人が日本語独自の発音体系を使っていると思う」等の、外来語を日本語独自の語彙として捉える認識であった。このように外来語を日本語独自のものとして考える場合には、英語と外来語の意味の相違を受容する意識が高いことが明らかになった。つまり、「外来語の意味が(英語と)違っても、日本語の解釈の仕方なのだと思う」、「(日本語と英語は)異なる言語なのだから意味が変化することもあるだろう」、「外来語は英語の意味を無視しているとは思わない」等の意味変化の正当性の認識から、「(英語と)意味の違う外来語にも、あまり混乱したり不愉快になったりしない」という意味変化の受容という認識へとつながっていた。

このような受容の認識がある場合には、外来語に対する肯定的な感情が見られた。具体的には、「外来語は(日本語の)他の語彙と違ってユニークだと思う」という外来語の独自性を評価する感覚から「外来語は面白い」という興味が挙げられた。対象者の言説からも、「外来語は日本語だが、独自に作った省略形のような気がしてかっこいいと思う。(対象者 C)」というケースが見られた。また、「外来語は情報を知るのに役に立つ」、「外来語によって語彙が増える」等の外来語の便利さを実感している肯定的感情も存在することが示された。

さらに、この肯定的感情が生じると、外来語に対して積極的な使用、または文脈を意識した使い分け行動へと向かうことが示唆された。積極的使用というのは、「もし言葉が知らなかったら外来語を作って試してみる」、「言葉が思いつかない時に外来語を作ることがある」等のように、英語を日本語のアクセントで発音することで意味交渉を成立させようとするストラテジーとしての外来語使用である。対象者からの言説からも、「自分の日本語の語彙はまだ限られているので、外来語がオプションとしてあるのはとても便利だ。日本語で何かを言おうとしているのに相手が理解してくれない時に、外来語を使うこともある。(対象者 I)」という和語の代替としての外来語使用が存在していることが分かった。

また、文脈による使い分けというのは、「外来語であれ和語であれ、より一般的な方を使いたいと思



う」、「周りの人がどのような言葉を使うかによって(自分の外来語使用が)変わる」等、文脈を意識して外来語を使用する行動である。これは、「日本人があまりその言葉を使わないと知ったら、状況によって外来語と和語を使い分ける」、「文脈によって外来語を使い分けている」等、外来語使用において周囲の状況や文脈を意識した行動であることが示された。実際に、肯定的感情が文脈を意識した使い分けへと向かう例として、「外来語それ自体は面白いと思うが、(外来語の使い分けは)世代間の問題だと思うので、周りの人がどのような言葉を使うかによって変わる。(対象者 A)」という言説が見られた。

以上のように、外来語を日本語として捉える認識が、肯定的な感情につながり、結果として外来語の積極的使用または文脈を意識した使い分けという行動をもたらしていることが示唆された。

### 3.2.2. 外来語を英語として捉える場合

外来語を英語として捉える認識とは、外来語を英語が変化したバラエティの1つとして捉えるものであり、具体的には、「外来語は英語を日本語のアクセントで話しているように聞こえる」、「(外来語は)英語の言葉を日本語の発音に取り込んだものである」等、あくまでも外来語は英語の言葉であり、それに日本語のアクセントをつけているという認識を指す。また、英語を中心として外来語を捉えることで、「外来語は日本語らしくない」という認識の存在が示された。これは、「外来語を使っているときは、自分が本当の言葉<sup>5</sup>を知らないと感じる」、「外来語(使用している時)は日本語を話している感じがしない」、「外来語は日本語らしくない」等の外来語を正しくないものとして捉えているものであった。

この外来語に対する非正統性の認識は、違和感、抵抗感、不安等の外来語に対する否定的な感情につながっていることが示された。対象者の言説においても、「英語にアクセントをつけて(外来語を)話しているときは、自分が本当に日本語を話している感じがしないので、自分にとってはそれ(外来語)を言うのはとても変な感じがする。(対象者 G)」という、外来語の非正統性が違和感へとつながっているケースが見られた。その他にも、外来語に対する違和感の具体的な内容として、「外来語は言い慣れるまでは居心地が悪い気がする」、「外来語の発音は自分にとっては不自然だ」という外来語それ自体やその音に対する違和感に加え、「(英語と)意味の異なる

外来語は、少し気持ちが悪い」、「(英語と)意味の異なる外来語に関しては、少し不適切だと感じる。等、英語と意味の異なる外来語に対する違和感が存在していた。また、外来語に対する抵抗感を表す感情としては、「外来語を使うと、話している相手は自分が本物の言葉を知らないのだろうと少し馬鹿にされているかもしれないと思う」ことから、「外来語を話す時、少し恥ずかしく感じる」、「(外来語を)聞き返された時、恥ずかしい気持ちがする」という感情が存在することが示された。さらに、この抵抗感には、「外来語を使うことは、日本語を話すのを怠けているように感じる」、「外来語を使っている時は、自分がずるいことをしているように感じる」という感情が存在することも明らかになった。これらの違和感や抵抗感に加え、外来語に対する否定的感情には、「外来語の使用に自信がなく、ためらう気持ちがある」、「(外来語の)発音が違うかもしれないと不安になることがある」といった不安も存在していた。

以上のような否定的感情を抱いた場合、実際の外来語使用においても消極的な使用や回避行動へとつながっている実態が見出された。外来語の消極的使用とは、「和語が分からなかった時に、仕方なく外来語を使用する」、「外来語が唯一使えるものだから使っている」等、他に表現手段が思いつかないために仕方なく外来語を使用するという行動である。実際に否定的感情が消極的使用へと向かうケースとして、「自分が他の言葉を知らないから仕方ないが、(外来語が自分の知っている英語と意味が違うかもしれないから)あまり使いたくない。(対象者 J)」という例が見られた。この場合、学習者自身の日本語能力が自分の望むレベルまで達していないことに對する妥協がその背景にある可能性が示された。

また、この消極的使用には、他者評価を強く意識したものが多く、「外来語を使っている時、周りの日本語母語話者に少し見られている気がする」ことから、「自分が『外国人』のように聞こえてしまうのを心配」しており、「外来語しか話さないような『ガイジン』になりたくない」という理由で外来語使用を回避している姿勢が伺える。さらに、「(外来語を使用することによって)日本語の知識不足という印象を与えたくない」、「周りの人に、自分が日本語をよく知っていると思われたい」という気持ちから、外来語の使用に対して消極的な行動をとってい

ることが明らかになった。以上のように、外来語を母語である英語として捉える認識が、外来語に対する否定的な感情を生み、そのことが外来語の消極的な使用へとつながっていることが示唆された。

#### 4. 総合的考察

本研究において、英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識には、外来語を日本語として捉える、または英語として捉えるという二つの異なる認識が存在することが明らかになった。これらは外来語を対象者の母語である英語の枠組みで捉えているか否かという違いに起因していると考えられる。その結果として、外来語に対する感情にも肯定的、否定的と異なる感情が見出され、それらに影響されて実際の外来語使用においても、積極的使用、文脈を意識した使い分け、消極的使用という3つのパターンが見られた。このことは、学習者が外来語をどのように捉えるかという認識が、実際の外来語使用に大きく影響しているという実態を示していると考えられる。では、英語を母語とする日本語学習者は、どのような場合に外来語を英語として捉え、反対にどのような場合に外来語を日本語として捉えるのだろうか。以下では、その差異に注目して考察を進めていく。

まず、外来語を英語として捉える認識とは、対象を自分の母語の枠組みの中で捉えているということであり、これは Berry et al. (2002) における異文化適応戦略の1つである「分離」、つまり「ホスト文化よりも自分の文化的アイデンティティを保持する」状態であると考えられる。つまり、外来語を日本語という対象言語の枠組みの中で捉えるよりも、自分の母語である英語の枠組みで捉えることで、その学習にかかる負担を減らそうという実利的かつ功利的な心理が働いている可能性がある。しかし、外来語はすでに日本語の語彙の一部となっており、原語である英語とは発音や意味の異なるものが数多く存在しているのが現状である(国立国語研究所 2006、など)。そこで、この外来語と母語との相違に違和感や抵抗感を抱くという、否定的感情へとつながっているのではないか。

また、この否定的感情とは、本研究の対象者がインタビュー時に経験していた初めての来日経験と関連していると考えられる。本研究の対象者にとって調査を行った日本滞在の約一カ月半という期間は、

自文化内において日本語を学習していた環境から、ホスト文化へ身を置く初めての経験であったと捉えることができる。畑佐(2008)においても、アメリカにおける日本語習得では、教室外で日本語を使う機会はめったにないし、日本語を使わなければ生きていけないわけでもないため、学習者が日本語に触れる機会は極めて少ないことが示されている。そのような背景からも、来日後のホスト文化での日本語使用経験は、学習者にとって大きなインパクトを与えたであろう。この環境の変化は、自らの考えや行動、感情を改めて調整しないとうまくやっていけない状態を頻繁に引き起こす可能性を意味しており(渡辺、1995)、しばしば異文化適応におけるカルチャーショックと関連付けられている。カルチャーショックとは異文化において慣れ親しんだ母国でのサインやシンボルを失ってしまい、そのために不安やフラストレーションなどの心理的疲弊が起こることだとされている(Ward & Furnham 2001 など)。この、否定的感情が、本研究においては上記の「分離」の態度とも関連して、外来語に対する抵抗感や不安という感情として見出されたと考えられる。

一方で、外来語を日本語として捉える認識とは、外来語を含む日本語の枠組みの中により入っていくこうとする姿勢であると言い換えることができる。これは、Berry et al. (2002) における異文化適応戦略の1つである「同化」、つまり自文化の保持よりもホスト文化との相互作用を重視する態度であるとされ、より積極的にホスト文化に入っていくこうとする姿勢であると言い換えることができる。また、異文化接触における比較的初期の段階では、新たな文化を吸収しホストとの表面的な関係を構築しようとする傾向があるとされている。つまり、本研究の対象者にとっても初めての日本滞在の初期においては、できるだけ新たな体験の中に自分を同化させることによって日本語能力を向上させようとした場合、外来語に対しても積極的な使用という行動につながっていた可能性がある。

また、この外来語を日本語として捉えている場合でも、ただやみくもに対象言語を取り入れようとする姿勢のみではなく、外来語を「自らの母語とは異なるもの」として客観的に捉えてそれを受け入れた上で、文脈を意識した使い分けという行動へとつながっている傾向も見出された。これは、外来語によって母語を意識化することで異文化の中の外来語

を統合的に受容しようとする行動であると考えられる。本研究の対象者の言説においても、「外来語について考えることで、自分が英語を母語としていることを改めて強く認識する」とあることから、外来語が学習者にとって母語の意識化のきっかけとなっており、この母語の意識化とは、自分の母語に対する「気づき」が生じている段階と言い換えることができる。この「気づき」の発生は、異文化適応においても重要な要素であり、(Shiracy & Levy 2009、八代 2005 など)、言語能力と関連しあいながら文化的統合へと向かうために必要とされるものである (Evans et al. 2009)。これは、文化を移動した者がしばしば、自分が母国を離れることで初めて自分の持つ文化を意識化する (Berry et al 2002) ことと共通している。このように、異文化適応のプロセスにおいて、自分の文化を意識化するきっかけとしての外来語の側面が、本研究において提示された。

## 5. 本研究の意義と今後の課題

本研究においては、英語母語日本語学習者の外来語に対する認識、感情、使用行動の具体的内容やその特徴を明らかにすることができた。その中で、外来語を母語である英語として捉える場合は、自文化のアイデンティティを保持する「分離」という異文化適応過程ストラテジーの影響を受けている可能性が示された。一方、外来語を日本語として捉えている場合は、自文化の保持よりもホスト文化との相互作用を重視する「同化」ストラテジーが用いられており、それが「統合」へとつながる傾向にあることが示唆された。

本研究の意義としては、第一に、英語を母語とする日本語学習者が外来語をどのように捉えているかの実態を明らかにしたことが挙げられる。それによって、外来語教育において、日本語教師が学習者の実態をより詳細に把握することが可能になると考えられる。第二に、これまでは単に学習者の苦手項目として一面的に捉えられてきた外来語が、学習者によって異なる反応を引き起こすものであると示されたことが挙げられる。このことは、今後、学習者に応じた教授法を開発していく必要性を示唆している。例えば、外来語を否定的に捉えている場合や使用を回避する行動がみられる学習者に対しては、単に外来語を知識として押し付けるのではなく、日本語の枠組みで捉える可能性を示した上で、違和感や

抵抗感を取り除くような外来語の扱い方を探る必要があると考えられる。

今後は、日本語学習者の外来語に対する態度と異文化適応との関連の実態をより明らかにするために、本研究の一時点のデータを発展させて滞日期間の違いによる差異を探究していく必要がある。また、対象者の日本語レベルや、滞日期間、実際の学習環境などの範囲を広げて自文化・ホスト文化に焦点を当てた量的な研究を行うことが必要であろう。さらに、個人レベルでの認識・感情・行動における不一致の有無などにも焦点を当てた事例研究を行う必要性もある。今後、さらに実証的な研究を重ね、外来語と異文化適応との関連を明らかにしていきたい。

## 注

1. 中山他(2008)においては、「外来語の代わりに『カタカナ語』を用い、カタカナ文字とカタカナ語の双方の教育を合わせたものを『カタカナ教育』と呼ぶ。」としている。
2. 調査時には、対象者全員が同じクラスを履修していたが、所属大学における学年はそれぞれ2年生8名、3年生4名、4年生1名であった。
3. 対象者のうち2名はスペイン語、クロアチア語を母語とするバイリンガル話者であった。
4. 一致率の作業を依頼した日本語母語話者2名は、KJ法の分析手法に精通した大学院修了者である。
5. 対象者の言説には“authentic”という語彙が数多く出現し、「日本語として正当な、日本語らしい」という意味で使用されていたものと思われる。

## 参考文献

- 萬八重子(1999)「日本語学習者に見られる外来語表記の誤りについてー間音節化の規則体系がどのようにカタカナ表記に表れるかー」『講座日本語教育第34分冊』早稲田大学日本語研究教育センター 85-105.
- 稲垣滋子(1991)「外来語表記の基準と慣用」『日本語教育』74号 60-72.
- 大曾美恵子(1991)「英単語の音形の日本語化」『日本語教育』74号 34-47.
- 国立国語研究所(2006)『新ことばシリーズ19 外来語と現代社会』国立印刷局
- 小林ミナ・カッケンブッシュ寛子・深田淳(1991)「外来語に見られる日本語化規則の習得-英語話者の調査に基づいて-」『日本語教育』74号 48-59.
- 小宮修太郎(1997)「学習者の出身国別に見た外来語の理解度に関する比較考察」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12号 43-62.
- 陣内正敏(2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』第11号 関西学院大学 47-

- 60.
- 鈴木俊二(2000)「日本語における「外来語」観の変遷ー接触言語学の視点からの考察ー」『国際短期大学紀要』第14号 27-94.
- 戸田貴子(1999)「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察-英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて-」『文藝言語研究言語篇』第36巻 筑波大学 89-111.
- 富田隆行(1991)「日本語教育と外来語およびその表記」『日本語学』7月号第10巻第7号 37-44.
- 中山恵利子・陣内正敏・桐生りか・三宅直子(2008)「日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方」『日本語教育』138号 83-91.
- 畑佐由紀子(2008)「アメリカにおける日本語習得」『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』スリーエーネットワーク 58-78.
- 堀切友紀子(2008)「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度ー英語母語話者の場合ー」『異文化間教育』28号 74-86.
- 八代京子(2004)「異文化理解の教育とトレーニング」『異文化理解とコミュニケーション 2 人間と組織 第2版』三修社 98-125.
- 山縣亜矢子(1999)「英語を母語とする日本語学習者によるカタカナ語表記の習得に関する調査」『言語学と日本語教育ー実用的言語理論の構築を目指してー』くろしお出版 49-64.
- 渡辺文夫(1995)「心理学的異文化接触研究の基礎」『異文化接触の心理学』川島書店 79-96.
- Berry, J.W., Poortinga, Y.H., Segall, M.H. & Dasen, P.R. (2002) *Cross-Cultural Psychology - Research and Applications - Second Edition*, Cambridge University Press
- Evans, N.W., Carlin, D.B., & Potts, J.D. (2009) *Adjustment Issues: International Students - Strengthening a Critical Resource*, American Council on Education
- Gudykunst, W. B., Ting-Toomey, S., Sudweeks, S., & Stewart, L. P. (1994) *Building Bridges - Interpersonal Skills for a Changing World*, Houghton Mifflin
- Martin, N.J. & Nakayama, K. (2004) *Intercultural Communication in Context*, Third Edition, The McGraw-Hill Companies
- Shirayev, E.B. & Levy, D. A. (2009) *Cross Cultural Psychology - Critical Thinking and Contemporary Applications - Forth Edition*, Allyn & Bacon
- Ward, C., Bochner, S. & Furnham, A. (2001) *The Psychology of Culture Shock*, Second Edition, Routledge

ほりきり ゆきこ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科  
yukikohorikiri@yahoo.co.jp

## The Usage of Loanwords by Japanese Learners and Their Background: Case of English Native Speakers

HORIKIRI Yukiko

### Abstract

In the field of Teaching Japanese as a Second Language, the study of Japanese loanwords has focused on their acquisition, and Japanese loanwords tend to be an obstacle for Japanese learners. However, actual situations about loanword usage by English native speakers need to be identical. The purpose of this research is to understand the process involved in the cognition, emotion and usage of loanwords by Japanese learners.

An investigatory interview was conducted with 11 Japanese learners who are native speakers of English. The study found that there are two types of cognition regarding loanwords: perceiving them as English or not. In addition, if learners consider the loanword as English they then tend to have negative emotions which lead to avoidance of that particular word. On the other hand, if they consider the loanword as Japanese then the tendency is to have positive emotions, and that would activate usage of the loanword, depending on context. The results suggest that Japanese learners' cognition about loanwords is related to the degree to which they consider loanwords from the framework of their mother tongue, and that is influenced by their cross-cultural acceptance attitude.

【Keywords】 Loanwords, Japanese Learners, English Native Speakers, Cross-Cultural Acceptance

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)